

「よう！ 帰^{けえ}ってきたのう！」

福岡県 中村直行

一 朝鮮へ渡る

父は、昭和十八（一九四三）年十月、日本製鉄八幡製鉄所から清津製鉄所へ転勤となった。父の転勤に対しては、父の姉であるキミ伯母の猛烈な反対があった。父はそのころ胃を患っていたので、極寒の朝鮮に行けばさらに胃病が悪化して、ついには命取りになるというのが伯母の反対理由であった。当時、父は若いころから会社勤めの傍らに家づくり^{くりに}に精を出していた。それこそ爪に火をともし生活をしながら努力を重ねて、十数軒の貸家を所有するまでになっていた。伯母は、転勤拒否で会社を辞めることになっても、家賃収入でやっていけると思っていたのかもしれない。

そうした騒ぎがあったが、父は予定通り清津へ発つ

た。清津での生活が長引くと思っていたのか、それとも朝鮮で骨を埋めると決心したのかよく分からないが、貸家の大半を処分した。

半年後の昭和十九年五月上旬、母・弟・妹そして私の四人は、九州の戸畑市（現北九州市戸畑区）を後に博多から連絡船に乗船、朝鮮咸鏡北道清津府へ旅立った。私は国民学校の五年生で十一歳。弟は二年生で八歳。妹は二歳の誕生日を迎えたばかりだった。当時、朝鮮は日本の統治下にあつたので、まぎれもなく日本国であつたが、なぜか外地と呼んでいた。当然、風土風習が異なる土地には違いなく、好奇心と不安が交錯していた。大きな客船。玄海灘の荒波、その荒波に空中に舞い上がる飛魚。広軌の列車、広々と賑やかな京城駅。車中で見る朝鮮人の風習。満蒙開拓団の一行。長時間の列車旅行と、すべて珍しかった。

清津には道庁があり、そして陸軍関連の諸施設があつた。清津から約十八キロメートルほど南にある、羅南に近い油坂の日本製鉄春日台職員住宅に落ち着いた。ちようどそのころは、新緑したたる一年で最も美しい

季節の五月であったので、社宅の裏山には西洋ツツジのほかにいるいろいろな彩りをした草花が一斉に咲き乱れていた。初めて見る鈴蘭、まさに谷間の百合だった。秋には野菊や桔梗が咲き、そして茸採りの楽しみがあった。このような環境に恵まれた静かな社宅だった。

学校は松原第一国民学校で、日本人学校だった。社宅からの距離は約四キロメートルほどでスクールバスが出ていたが、四年生以上は小国民と呼ばれていて徒歩通学だった。通学にはたつぷり一時間かかった。途中には人家も少なく殺風景であったが、時折清羅街道に出て、朝鮮の人の牛車に乗せてもらって通学したこともあった。冬は吹雪に遭ったり、凍結した道路や河を歩くのがつらかった。一度猛吹雪で動けなくなり、父に救出されたこともあった。

社宅はオンドル、ペチカと暖房装置は万全で広い庭のある家だった。

朝鮮に渡っても、戦時下の体制で内地と同様に防空訓練とか勤労奉仕などがあったが、それでも内地ほどの緊迫感はなかった。平穏な日々で至極のんびりと暮

らしていた。

昭和十九年の十二月末ごろだったが、突然に父が吐血した。胃潰瘍だった。そのまま翌年の春まで病床に臥した。当時は手術はなく、自然治癒療法だった。四月には陸軍士官学校在学中の兄が見舞いに来た。兄が去つてすぐに、父は起き上がり少し歩いたが、その姿を兄に見せることができなかった。父は残念がついてた。五月には、母方の祖母と伯母一家が見舞いに来てくれた。伯母が、満州の牡丹江へ転勤となり、その途中に寄ってくれたのであった。そのときには、父はほぼ普通の生活に戻っていた。会社は六月まで休職していた。

八月になり、学校も夏休みになった。八月九日、突如ソ連が対日参戦を通告して、満ソ国境から雪崩のごとく侵攻して来た。瞬く間に、雄基・羅津と次々に攻略したというニュースを新聞で知った。子供だった私には、それがどう展開するのか分かるはずがない。ただ、日本の軍隊は強いものだから、必ずソ連軍を撃退すると安心していた。

二 昭和二十年八月十三日を迎える

その日はどんよりとしていた。午前十時ごろ、突然耳をつんざくような「ドカーン！」という腹の底に響く轟音がした。そして、それに続いて大地の振動。私は思わず外に飛び出した。道路では社宅の人たちが周章狼狽の状態になっていた。「艦砲射撃だ！」と叫ぶ声があった。海上の様子を見ようと裏山に登りかけたとき、警防団の人から「ソ連の軍艦が清津を砲撃中、危険だから家に戻りなさい！」と注意された。帰宅してみると、母がリュックサックや大きな風呂敷を広げ、衣類などを詰め込んでいた。驚いたのは、夏なのに冬物の衣類を準備していることだった。「避難命令が出るかもしれないので、すぐ出掛けられるように準備をしておくのよ」と母は言っていて、私が持つ荷物を差し出した。リュックサックはパンパンに膨らんでいて重かった。背負うと後ろに倒れそうになる。弟には、少し小さめのリュックサックが用意されていた。弟は「嫌だ！」と言っていて、随分駄々をこねていた。

母の話では、父は轟音を聞くとすぐに会社へ出掛け

て行ったとのこと。「清津にはソ連軍が侵攻して激戦中。製鉄所も攻撃された模様」という警防団員の話に耳にした。急に父のことが心配になってきた。

午後二時ごろ、避難命令が出た。避難先は、最近裏山の中腹に掘ったトンネル式の防空壕だった。母にせき立てられ、ぐずる弟の手を引っ張りながら家を出た。母は妹を背負い、大風呂敷と手提げ袋を持った。隣のＴさん宅へ声をかけたが、「今雑嚢を縫っている最中だから、お先どうぞ」との返事に、呑気な人たちだと苦笑しながら先を急いだ。続々と社宅から防空壕へ押しかけて来た。だれ一人としてこれが社宅の見納めとなるのか、これから塗炭の苦しみをなめることになるなどの不安は全くなく、むしろ行楽気分の雰囲気ですら顔ささえ散見された。

一時間ほど経った。「戦局は緊迫してきた様子で、清津から避難するとの社命が出た。これから羅南へ避難する」という団長の指示があった。順番に防空壕から清津街道へ向かった。

街道に出て唾然となった。街道は、次から次へと続

いてくる長蛇の列。割り込む余地さえなかったが、ちよつとしたときれをかき分けて割り込んだ。みんなは阿修羅のごとき形相で怖かった。「製鉄所が燃えている！」との叫び声に振り返ると、製鉄所付近から煙が拡がっていくのが見えた。途端に、またも父のことを思い出して心配になってきた。雑踏の中では後から押されて前へ前へと進むしかなく、すぐにそんな感傷もかき消されてしまった。

しばらくして、清津街道から羅南川沿いに右へ曲がる地点に来了。道路脇の電柱に登っていた製鉄所関係の人が、「日鉄の方は右へ入って下さい！」と叫んでいるのを耳にした。私たちは、母と親しいHさん母子と一緒に歩いてしたが、私たちが右の道へ入りかけたとき、Hさんたちはそのまま羅南の方に向かって歩いていた。慌てて母が呼び止めたが、Hさんは「羅南へ行けば、応召した主人の消息が分かるかもしれないので！」と言って、そのまま行ってしまった。

右に入った道は、大半の人が製鉄所関係の人たちばかりだったので、狭い道でも広い道のように思えた。

魚遊洞という部落に差し掛かったころ、日が暮れて、雨が落ちてきた。雨宿り先を探していたとき、Kさん一家に出会った。父が後ろの方にいると知らせてくれた。通勤のときの服装のまま左手に日本刀を持ち杖を突きながら、「無事だったか！」と言って近づいて来た。母は「日本刀より家財の一つでも持って来てくれればよかったのに」と小言を並べた。父は「すぐ戻れるよ！」と言って相手にしなかった。清津の様子を聞いたが、父は何も話さなかった。持っていた日本刀は、いずれ任官する兄のために買っておいた物で、「名刀だ」と言って父は自慢していたものだった。その夜は魚遊洞で泊まった。今思えば、この八月十三日は長い一日であった。

三 白岩に向かつて

十四日の昼ごろ、富潤洞という所へ着いた。ここは、会社が指定した場所だったが、飯場のような小屋が散在していた。戦局や社宅の状況を知りたかったが、確かな情報はなく、むしろ流言飛語のようなものばかりだった。十六日の昼前に、突然にソ連軍の戦闘機三機

が飛来し、機銃掃射を加えた。私は慌てて道端の麻畑へ避難した。今思い出してもとても怖かった。ソ連機は数分ぐらいして飛び去り、幸い犠牲者はいなかった。恐らく冷やかしかつたのだろう。その直後、所長さんが来られ、全員集合して指示を仰いだ。解散後、父から「明日十七日、茂山に向かって避難する」という話があった。その日、給料の支給があつて母はにこにこしていた。所長さんは清津へ戻られた。清津の状況を父に尋ねた。「一旦は日本軍の反撃が成功したが、その後にはソ連軍の逆襲があり、まだ予断を許さない状況」と話してくれたが、明日はさらに奥地へ避難するということとは、当分清津には戻れそうもないということでは不安が募ってきた。

十七日の朝を迎え、班に分かれて富潤洞を出発して茂山へ向かった。同行する人数は皆目分からなかったが、何ら不安は感じなかった。山越えとなった。上り坂を、背中にリュックサック、手には風呂敷包みを持ち登った。ぎゅうぎゅうに詰め込んだリュックサックの重さに体が後ろへ引かれることたびたびで、何

度も道や山の崖の木や蔓を掴んで支えた。山道に手を付き、這い上がることもあった。六年生にしてはチビだった私のこと、背後の人にはリュックサックが一人歩きしているように見えたのか、追い越す人からは驚きとか激励の聲が飛んだものだった。母も、三歳にしては大きい方の妹を背にして、両手に荷物を抱えて登っていた。父は弟のリュックサックを代わりに背負い、刀を持ち杖を突いて登った。それでも、病み上がりの父にとつてはつらいことだろうと思つた。後ろを振り向くと、麓から峠までの山道は人・人の行列で途切れることがなかった。ようやく峠を越えて野原に出た。その夜、初めて野宿をした。

翌日になって、急に行き先が延社に変更となった。真夏のかんかん照りの中を歩いた。一日に三里か五里歩くのが目標だった。道路に沿って結構大きな川が流れていた。川原で休憩を取って炊飯をした。父の鉄兜が鍋だった。米は携帯していたが、いつまで避難が続くか分からぬということで、父からは「妹以外は食べなくてはならない」との厳命があつた。私たちは、朝鮮人

の農家の畑から諸などを失敬して食べた。道中で日本兵を見掛けることが多くなった。老人や病人などの荷車押しの手助けをしながら同行していた。武装はしておらず、変だとは思った。

八月二十日ごろに延社へたどり着いた。收容所とされた小学校の講堂へ向かった。途中の街道沿いの家々の軒先には、今まで見たこともない旗と赤旗が掲げてあった。それが朝鮮の国旗だということは、後で知った。往來する朝鮮人の目を冷たく感じた。だけれが「日本は負けたようだ」と叫んだ。まさかという気持ちが強くと、信じられなかった。道路沿いに並ぶ朝鮮人が賑やかに旗を振っているのを見ると、やはり負けたのだと思ひ、急に力が抜けてしまった。みんなの足取りも重くなった。講堂はすでに満員だったが、どうにか割り込めた。夜半に「ソ連兵が来るぞ！」との声で、一瞬慌てたが、デマかとも思ひそのまま留まっていた。翌未明、楡坪へ向かった。楡坪から白岩行ききの列車に乗り込む予定だった。昨日までの強行軍で疲れきっていたので、満人の荷役を頼み私が同行した。その満

人は若い人で足取りも早く、私は必死になって後を追った。駅の近くに到着して、父たちが来るのを待った。だがなかなか姿は見えず、通る避難民も少なくなつて

心細くなつてきた。そのとき、中年の朝鮮人男性二人が近づいて来て荷役の満人に話し掛けたが、彼は応じなかった。そのうちに一人が私に話しかけながら、「お前は捨てられたんだ。私は日本から昨日帰つて来た。日本は滅茶苦茶になつている。帰つても良いことはないよ。小父さんの家に来ないか。楽させてやるよ」と近寄つて来た。私は怖くなり、満人の方へ身を寄せた。彼は状況を察したのか、私を引き寄せて追つ払う仕事をした。そのとき、十数人の避難民の一団が通りかかり、途端に彼等は立ち去つた。

そのうちに、ようやく父たちが到着した。事件のことを父に話した。父は、その満人に礼を述べ別に「御札」を手渡したが、受け取らなかつた。別れるとき初めて笑顔を見せ、私の頭を撫でてくれた。

楡坪駅から列車に乗った。久しぶりの列車だが、無蓋車だった。列車は鈴なりで、揺れるたびに振り落と

されないよう横の人にしがみついていた。

白岩は、標高約千四百メートルの町で、高原の風がうすら寒かった。駅に近い倉庫に落ち着いた。翌日、駅頭が騒々しくなった。ソ連軍の到着を待つ朝鮮人であふれていた。汽車が入って来たが、ソ連兵が鈴なりになって乗っていた。初めて見るソ連兵は赤ら顔で大男、何を口に入れているのか分からないが、熊のように始終もぐもぐさせていた。着ている軍服の汚いことと、マンドリンに似た銃を肩から吊していたことが印象的であった。女兵もいた。日本軍には、女兵はいなかったのが驚いた。彼女らも赤ら顔で大女だった。ソ連兵進駐は私たちを震撼させた。時計・宝石・貴金属や刀剣類は没収された。我が家でも、父が大切に持ってきた日本刀も没収された。痛快だったのは、ソ連兵が略奪した腕時計をいくつもはめていて、針が動かなくなるとすぐに捨てた。それを私たちが拾って動かすと、驚いた顔で「ハラショー！」と言って、また腕にはめていた。まったく程度が低い民族だと思った。

四 端川での収容生活

どんな経路で端川へ来たのかは思い出せないが、波止場近くの大きな陸屋根の建物に入居した。いくつにも部屋が仕切つてあって、それぞれ六畳ぐらいたった。床は土間で窓は無く、穴蔵に等しかった。昼でも暗く、夜はもちろん真っ暗。夜は冷え込むので毛布にくるまって寝たが、南京虫の襲撃に悩まされた。幸いなことにソ連兵は駐留していなかったが、悩みは保安隊だった。彼らは「保安隊」と書いた腕章を着け、戦闘帽をかぶり日本刀を腰に下げていた。一見して、元日本軍の将校そっくりの格好だった。彼らは、「荷物点検」と言ってズカズカと部屋に入つて来た。「荷物点検」とは口実で、若い女性や留守家族の若い奥さんが目当てだった。目に余るような行為はしなかったが、それにしても目障りこの上なかった。

ある朝、外の便所で窓から何気なく覗くと、避難民全員が両手をあげたまま広場に集合するのが見えた。「何事だ！」と表に飛び出た途端に、頭をぶん殴られた。振り向くと、保安隊員が拳銃を突き付け「広場へ行け」とにらみつけていた。広場では、中央の踏み台

の横に一人の日本人男性が手錠をはめられ立たされていた。彼の前には、男女合わせて四十人ほどの日本人が後ろ手にくくられ、整列していた。眼鏡をかけた中年のインテリぶった朝鮮人が踏み台に上がって、「お前たち日本人が三十五年間、我が国の同胞にひどい仕打ちをしてきた。今からその仕返しをするんだ！」わめいていた。手錠の人は、井戸汲みの際、つるべと一緒に日本刀が揚がったのを見つけられ捕まったとか。濡れ衣だった。縄付きの人たちは、当時の在住者で教員、官吏、そして警察関係者だった。夫婦者もいた。三十分ほどで解散したが、捕えられた人たちはトラックでどこかに連行された。夕方、女性たちだけが戻って来た。沈痛な面持ちだった。

端川での生活が約一週間経った。保安隊の執拗な侵入や、南京虫襲撃で毎日が嫌だった。そのころ、日本行きの間船のうわさが立っていた。父はあちらこちらと奔走してお金をつくり、毛布一枚で乗船することになった。総員三十人ほどだった。しかし、結末はすっかりだまされてしまった。出港するやいなや、船倉に

押し込まれた。快晴だったのに急に嵐だと言って船頭が上から覗いている。船は揺れて海水が侵入してくる。

翌朝未明、「着いたぞ！」という声。それに続いて世話人が甲板から「山口の仙崎だ！」と叫ぶ。しかしひと晩で着くとは考えられず、それよりも疲労で早く上陸したかった。追い立てられながら下船し、浜辺でひと息入れて腰を下ろすやいなや、松林から十人ほどの朝鮮人の若者が手に手に鎌や棍棒を持って出て行くと追い立てた。転がるようにして海岸にそった道を逃げた。どこで下船させられたのか定かでないが、その後興南を通ったので、その付近の浜辺ではなかったかと思う。離れ島でなくて良かった。

五 咸興での物乞い生活

浜辺を追い立てられた私たちは、まもなく国道らしい広い道に出たが、相変わらず避難民であふれていた。行く先も不明だが、その後を追って行くしかない。途中、興南の街を道路下に見た。夕方になって、ようやく咸興の駅前へ到着した。九月上旬だったと思う。間船の件以来、会社のグループとは別行動になり、単独

行動をとっていた。父は日本人世話会の人に状況を尋ねたが、既に北緯三十八度に国境線が引かれていて、朝鮮は南北に分断され南鮮に行くことはできないとのこと。強行突破しても、すぐ追いつ返されるといふ話だった。

日本人世話会の斡旋で、日の出町在住者の家の二階を借りたが、相部屋だった。相手は偶然にも製鉄所の人たちだった。Mさんの留守家族四人と、Nさんの留守家族二人、それに私たちの家族五人の計十一人が六畳のひと部屋に入ったが、久しぶりの畳の上で何回も何回も臭いをかいた。

咸興へ来て一週間ほど経ったが、そろそろ食糧も乏しくなってきた。米はまだ若干あったが、これは妹の分であった。闇船の一件でお金も少なくなる。物々交換とんでも、闇船での故意の海水浸漬で大半の物は処分したので、手持ちが少なかった。弟は相変わらずわがままを言っていて、母も弱っていた。それでも父は平然としていた。病み上がりの体で弱っているのは、と私は心配していたが、そんな様子はなかった。

ある日、私は郊外へ散歩に行った。畑の作物でも失敬しようという下心があったが、そこで日本人母子の物乞いが、食べ物ももらい喜々として立ち去る姿を見た。そのとき私もやってみようと思ったが、若干心の中での葛藤があった。一軒目は怖じ気づき戸をたたけず。二軒目は犬に吠えられ逃げた。それからも気を取り直し再挑戦したが、成果なくあきらめかけていたときに、やんぱん両班の家の前でオモニが外に立っていた。手招きするので寄って行くと、家に入れて言ってご飯をいっばい食べさせてくれた。帰りには、さらにご飯を鍋いっばい詰めて持って行けと言った。何度も何度も頭を下げた。

その晩は、久しぶりにご飯の夕餉だった。母は喜んでくれたが父は全然箸をつけなかった。そして私は「ご飯はするな！」と大目玉を食らった。私は黙ってうつぶいていた。しかし止めるつもりはなかった。父の怒りよりも、母や弟妹が喜ぶ姿を思うとなおさらだった。まして父は病弱であり、私が頑張らねばという責任感

さえ湧いていた。

翌日から必死になって物乞いに駆けずり回った。「ウリ アブジーオンマーオブソ。サリ チョコンツ ショー」とか、「コマブスムニダ」の朝鮮語だけでときには思いがけない収穫があり楽な日もあったが、大半はつらい日々だった。しかし、ひもじさに耐える方がそれ以上につらかった。咸興にいる間、物乞いで何とか食いつなげた。

六 父の死

九月下旬のころ、父が仕事を探してきた。農家の手伝いだっただが、母は「無理をしないように」と口を酸っぱくして言っていた。父はそれには耳を貸さず、毎日出掛けた。日当以外に米や雑穀をもらってきた。父はもともと野良仕事が上手だったので、意外に重宝がられたのかもしれない。しかし日が経つにつれて、元来背は高くやせ型だった父は、ほほがこけ始め、まるで骸骨のようにやせてきて、歩くのも杖にすがってよろよろと歩くようになっていた。

十月十三日のことだった。その前日には「疲れた！」

と言って仕事を休んだ父が急に目撃されたが、その後ろ姿は幽鬼のようだった。途中で気を失っていたとかで、服が汚れていた。

その夜、父が、「富士江！ いま、日本に帰った夢を見た。すぐ帰れるぞ」と哄笑したが、それは譫言うわごとだった。

翌十四日の朝、母が父の様子がおかしいと言っておろおろしていた。世話会から医者への往診があったが、その医師は偶然、製鉄所病院のM先生だった。しかし父はすぐに事切れた。死因は胃潰瘍の再発だった。簡単な葬式をしたあとで、遺体は郊外の丘陵地に埋葬した。そこは松林の中だった。私がひとり立ち会った。享年四十八歳。埋葬の帰途、どつと涙があふれてきた。

七 興南に移る

十一月月上旬ごろ、私たちは興南へ移動させられた。父の死など思い出せない咸興から、後ろ髪を引かれる思いで興南へ向かった。その日は初雪だった。暁星寮と名付けられた旧日本窒素の工員寮に入ったが、寮

の正面は、日本軍傷病兵の收容所であつた。医者も看護婦も日本人だつた。周囲にはソ連軍の兵營があつた。常時監視されているようで、威興とは一変した環境だつた。部屋は二階の五号室。同居者は、変装した兵隊さん二人と富潤洞から来た四人家族と私たちで合計十人。部屋は六畳。引き戸は開閉ガタビシで、錠は壊れていた。夜はロスケの侵入に備え、戸の前に私が寝た。

富潤洞の家族の女の人は、既に髪を切つて男装だつたが、母はまだ何もしていなかつた。皆で髪だけでも切るように忠告したが、応じなかつた。

十日ほど経つた夜だつた。突如、ロスケが二人侵入した。一人は、すぐに私にマンドリンの銃口を向けた。これは撃たれると思ひ、体が震えた。もう一人が燐寸を擦つて室内を見回した。すぐに母を見つけて動きかけたので、私はそいつの足に跳びついたがすぐに蹴られて、奴の足で押さえつけられた。母は飛び起きて妹を抱き締め、必死に暴漢の手を振り払つていた。妹が母から離れないのに根負けしたのか、ロスケはあきらめて出て行つた。その途端、妹が泣き叫んだ。日頃、

駄々をこねるたびに「ロスケが来るぞ！」と脅していたので、逆にそのときには泣かなかつたのかもしれない。案の定、一週間後再びロスケの侵入があつた。同じ連中だつた。今度は妹も母にしがみつき大声で泣き叫び、私もたたく鍋を用意していたので、ガンガンとたたいた。連中はびっくりしてすぐ去つた。

翌日、同室の男の人の仲介で、隣の六号室の男性家族二世帯が、私たち及び富潤洞の家族と入れ替つた。六号室は戸も鍵も頑丈だつた。既に五人家族が入つていた。移るとき、母が「六とか三とかの教室は、縁起が悪く嫌だわ！」と何気なくつぶやいていたが、私は笑つて聞き流していた。母は早速髪を切つた。

本格的な冬となつてきて、外出もままならなかつた。毎日風との戦いで逆に不感症となつた。ときどき赤い色をした風も吹いていた。興南に移つてからは、幸い亡父の稼ぎで貯えていた米と雑穀及びお金もあつて、飢えずにいた。そして、物乞いに出掛けることもなかつた。

発疹チフスやアメーバー赤痢、奇妙な熱病（再帰熱か？）などの伝染病、そして栄養失調により多くの死者が発生していた。一階の片隅には遺体安置所が設けられていた。形状が三角形なので「三角山」と呼ばれていた山が墓地になっていたが、凍結のため埋葬が困難で、日を加えるに従って遺体の積荷は増えていった。

昭和二十一年の正月を迎えた。父の欠けた寂しい殺風景な我が家の正月だった。昨年は父の病臥で暗い正月であったが、それでも親子揃った正月だった。

正月が過ぎてすぐに、弟好男がアメーバー赤痢を患った。母は看病にかかりきりだった。一月十日の晩のことだったが、突然弟が餅を食べたいと言いだした。母はたしなめていた。翌朝、私は餅を求めて物乞いに出た。何とか調達できた。リングゴも手に入った。喜び勇んで帰る途中に、突然朝鮮人の子供が出てきて「イボンサラミ（馬鹿たれ）」と叫んだ。私はつい「この野郎！」と殴りかかった途端、大人や子供十数人に囲まれて殴り倒されて、餅やリングゴは路上に投げ出された。

泣きじゃくりながら拾い集めたが、それほど汚れてなかった。急いで帰り、「ただいま！ 餅があつたよ！」と戸を開けて叫んだ。弟は、母に抱かれて水を飲んでいった。弟はコップから口を離し、「兄ちゃん！」とひと言言つて事切れた。母は泣き崩れた。それは一月十一日午前十一時のこと、弟は九歳だった。弟は生前、一度も私を兄とは呼ばずに「直なお」と呼んでいた。それが、初めて「兄ちゃん」と言った。そして死んだ。

九 母の死

弟の死以来、母が急に元気をなくした。食事ものを通らないほど、消沈していた。私も突然に熱が出て、数日寝込んだ。細々ながら食いつないできた食糧の貯えも、底をついてきた。私は起き上がったものの足元がおぼつかなく、物乞いに出掛けるほど回復しなかった。母は、少しのお金でやり繰りをしていた。そのころから母のまぶたが少しづつ腫れてきた。母は別段気にもしていなかった。二十日ごろだったが、母が弟の外套を明太魚や米と交換してきた。明太魚の汁を

こしらえたが、久しぶりにおいしかった。食事が済むと、母が突然に話し始めた。「お母さんに、もしものことがあったらミドリちゃんを頼むよ。無事日本へ帰り着いたら、おそらく博ちゃんは戦地に行っていていなかもしれないから、大川（福岡県大川市）という所に渡辺守という人がいるので、現在のその人を頼りなさい。その人は一番上の兄さんだから。この袋に通帳と印鑑、外に大事な物が入れているので、大事に持って行くのよ」と言った。まさかこれが母の遺言になるとはつゆ知らず、そのときは聞き流していた。もう一人の兄がいることは、初耳で驚いた。そういえば父の渡鮮直後に父を訪ねて来た青年がいたが、そのときは父に似ている人だなと思った。母が何も語らないので、そのままになっていた。

弟が死んでから、富潤洞の家族が相次いで亡くなった。一家全滅だった。朝、目覚めてみると事切れている。静かな死であった。毎日多くの人が死んでいくことを耳にしていたが、みんなこのように死ぬなら楽なものだと思い、恐怖感すらなかった。

一月二十六日の朝だった。目が覚めて母に声をかけたが返事がない。体を揺すっても反応はない。隣にいた人が「昨夜水を欲しがっていたので飲ませてあげたが、末期の水だったのかな？」とつぶやいた。そのとき母の死を知った。穏やかな顔だった。三十五歳。死因不明。妹はキョトンとしていた。私も放心状態だった。しばらくしてからとめどもなく涙が出た。ついに私と妹は孤児になった。

十 遺児室に入る

母の遺体処理後、団長さんが来られて、私たちは「遺児室」へ案内された。香川さん（現姓中村登美枝さん）という方が世話をしていた。まだ二十歳前で、みんな「お姉さん、お姉さん」と呼んでいた。私たちの入室で総員十三人となった。お姉さんも弟と二人だった。私は入室してすぐに熱病で二、三日床に就いた。妹は、母の死以来口を利かなくなった。笑うこともなかった。声をかけても、ジロリとらみ付ける態度となった。しかし、夜中には「お母さん！」と寝言を言っていた。私よりお姉さんの方が妹の面倒をよく見てくれていた。

妹がようやく馴染んだときには、みんなで歓声を上げてくれた。遺児室では毎日歌を歌ったり、ゲーム遊びをして楽しく過ごした。

そのころになると、米などの食糧の配給が始まった。もともと早ければ母も死なずに済んだのにと、悔しい思いがした。虱駆除しよみの煮沸も行われたし、入浴もできるようになった。ある日、「残務整理で出てきた」と言つて、団長さんが、通帳と印鑑を届けてくれた。母の手提げ袋のチェックを忘れていたので驚いた。六号室の二家族は全滅となり、妹と二人だけが生き残ったことを知った。

ようやく元気になったころ、「陰囊水腫」という病気になる。ソ連軍の軍医の診察を受けた。若い女医だったが、一週間くらいで治った。

ときどき、ソ連兵の食堂で厚切りの芋の皮を拾ったり、近くの沼でクワイを採ったりして、みんなで煮て食べた。

十一 興南を脱出する

三月末に興南を脱出した。妹はお姉さんに背負ってもらい助かった。汽車で永興に着き、大きな倉庫に落ち着いた。そこも避難民で満員だった。四月で桃の花が咲いていて、桃源郷のようだったことを覚えている。歩いているときに、運動会で賑わっている学校が見え、急に学校が恋しくなった。

寮を出るときか、駅だったかは定かでないが、五号室にいた二人連れの男の一人から、実家への届け物を頼まれた。その男の人が母と雑談の折、その人の実家が父の実家の隣村と分かったからだ。住所は佐賀県千代田町迎島字中津だった。届け物は軍隊用ベルトで、形見だった。そのころ、ソ連軍のサハリン出稼ぎの募集があつて、その人は連れの人と応募した。いつ帰国できるか分からないからということだったが、私が引き揚げてから訪ねたら、既にその人は帰還していた。サハリン行きを断り、脱走したということだった。ベルトは記念品としてもらい、高校卒業まで愛用した。

十二 三防での苦難

トラックで元山へ出て、汽車で国境へ向かった。車

内は居住者の人が多く、荷物をたくさん抱えていた。福溪駅でソ連兵に捕まった。そして元山へ逆戻りの途中、三防駅で降ろされた。海拔千四百メートルの山峡の駅だった。団長から山越えて国境に向かうと伝えられた。体調不良の者は残留との達しもあった。その日、妹の具合が良くなく「用心した方が良い」とのお姉さんの忠告で、やむなく残ることとなった。そのとき、不安と生き抜く決意が交錯して頭の中が混乱した。

残ったのは九歳から五歳までの八人と乳飲み児を抱えた二十歳ぐらいの女の人だった。その人は熊本出身で、「乳飲み児は亡くなった姉の子」と言った。幼児たちは、親たちとはぐれたと言っていた。駅に近い集会所の跡に入居したが、団長が食糧を置いて行ってくれたので助かった。私たち以外に避難民は一人も見当たらなかった人家は、まばらだった。夜は底冷えして雹も降った。しかし温泉があり湧き水もあったので飲んでみたら、サイダーかと思うほどおいしかった。

妹はすぐに元気になった。女の人と相談してそこからの脱出を計った。徒歩は無理なので、汽車に乗るし

かない。それから彼女と共に駅へ掛け合いに日参したが、相手にされなかった。

ある日、保安隊が私たちのことを知り便宜を図ってくれて、朝の一番列車に乗せてもらった。指示された大光里駅で下車。伝言メモを駅にいた保安隊員に手渡した。私たちは、駅前の広場にたむろしていた住民避難民の前に整列させられた。保安隊の人が、私たち孤児への献金を呼びかけた。思いがけない大金が集まったのには驚いた。全部ソ連軍票だった。宿と、そこまでの牛車を手配してもらった。このときばかりは、保安隊の人が神様に見えた。

十三 三十八度線を突破する

宿を朝早く出発。保安隊員にもらった案内図を手に歩き出した。しかし大変だった。道は広く砂利道。全く人の姿も見えない。幼児ばかりなので、その行動は遅々として進まない。引つ張って歩くが、最年少の妹は途中で座り込んで全く動かなくなった。叱り飛ばしながら引きずって行った。分かれ道で通りかかった朝鮮人に国境への道を尋ねて、さらに進んだ。大きな河

に出た。渡船があつたので、持っていたお金を全部船頭に渡した。飛び上がって喜んでいた。百メートル先にソ連兵が見えたが、見付からずに川を渡った。ついに国境を突破した。五月二十五日のことだった。昨年の八月から九カ月余りの苦難の日々だった。両親と弟を失い、妹と二人だけ生き残った。これも周囲の人たちのお世話があつてのこと。感謝したい。朝鮮の人たちも善悪様々だったが、私は善い人たちに恵まれたのだった。そうした感傷に浸りながら、対岸へ再訪の誓いを込めて別れを告げた。最後に絶叫した。「ロスケのバカヤロー」

十四 京城に向かう

国境を突破すると、すぐに米軍のジープが来た。おもちやの兵隊かと思われた。ボディチェックがあり、東豆川の駅前では予防注射とDDTの散布を受けて全身真白となった。列車で京城へ向かい、駅前で世話会の人々が米軍の軍医を呼び、私たちを診察した。結果は全員栄養不良。二週間くらいの療養を指示された。南大門近くの旧日本料亭に収容されて、九カ月ぶりに新

しい服を与えられ、散髪をされた。急に身が軽くなった。その後毎日診察があつて、二週間後の最後の診察結果はOKとなり、帰国の許可が出た。

十五 引き揚げ帰国

六月九日ごろには、釜山は伝染病が流行っていたので、郡山から引揚船に乗船した。米軍の上陸用舟艇で、大きく開いた船首から乗船した。翌日の夕方には博多港に入港した。検疫のため停泊し、その翌日の夕方には、今度は船上歓迎会があつた。指名されて私も妹も歌った。妹の「ねずみの歌」は拍手喝采だった。香川のお姉さんから習った歌だった。そのとき、初めて「リングの歌」を聞いた。明るく良い歌と思ひ、すぐに覚えた。

六月十三日の夕方上陸許可。約二年一カ月ぶりに出立と同じ場所の博多であり、感無量だった。崇福寺というお寺が孤児預かり所とかで、下船後そこに向かった。境内の通路で、三防駅で別れた香川のお姉さんにバッタリ会った。広島に帰られると聞いて、住所を知らせてもらった。急がれていたもので、ゆっくり話す暇

もなかった。そのとき、一緒に下船したはずの熊本の人を見失ったことに気づき探したが見当たらず、迂闊さを今でも悔いている。

十六 父の実家へ

崇福寺に二週間ほどお世話になった。製鉄所の方が会社関係の引き揚げ孤児がいまいかと尋ねに来た。私と妹だけだった。父方のキミ伯母に頼ろうと思い、その人に連れて行ってもらった。伯母は久留米市城島町

青木に住んでいた。伯母はびっくり仰天。「よう 帰けえ

ってきたのう！」という第一声。翌日、筑後川を渡って浮島という村の父の実家へ連れて行かれた。伯父は健在だった。それから新制中学校二年の二期までお世話になった。

十七 あとがき

引き揚げ後に、朝鮮で亡くなった母は、継母だったと知った。青天の霹靂だった。実母は、私が一歳九カ月のときに亡くなっていた。実母の実家は、父の実家から三軒先にあった。村でも有数の大農家で、父の実

家とは雲泥の差、祖父母は健在だった。祖母は毎日私の所へ来て、こまごまと世話をしてくれた。祖母の計らいで、実母のすぐ下の弟だった叔父に新制中学二年のときからお世話になった。叔父は私の生まれ故郷北九州に住んでいた。叔父夫婦には息子が一人だった。我が子のようにかわいがられ甘えに甘えた私は、大学まで出してもらった。以後、平穩無事裡に定年。今年七十四歳になった。

兄は、縁あつて興南でお世話になった香川のお姉さんと結ばれた。妹は父方の伯父夫婦に小学校四年までお世話になった後、兄夫婦に育てられ幸せな生活を送っていたが、六年前の夏に急逝した。五十九歳だった。これには大変ショックだった。

守兄さんにもときどき会った。父そっくりだった。就職後、会う機会がないうちに亡くなられた。急死だった。

春日台社宅の隣家のTさん一家及び羅南街道で別れたHさん一家は、八月十六日には帰国したと聞いた。継母の姉一家も、祖母と共に翌年帰国していた。これ

が運命の不思議というものかと思った。

平成十三（二〇〇一）年九月、北朝鮮ツアーに参加した。五十六年ぶりだった。咸興の「盤龍山」で父を、興南郊外の「咸興本宮」というお寺で母と弟の供養をした。自由行動がとれないツアーなので、肝心の場所には行けなかった。清羅街道で清津へ向かう途中、春日台らしい丘陵を見た。清津のホテルで明太魚汁が出た。口に運んだ。突然涙が出てきた。興南で母と食べた明太魚汁の味と光景が思い浮かんだ。